二〇二五年度　一般入学試験問題　国語

始まりのブザーが鳴るまで問題冊子、解答用紙に手を触れずに、
左記の注意事項に目を通しておくこと。

◎　問題用紙は1ページから20ページまであるので、始まりのブザーが鳴ったらすぐに確認すること。
◎　最初に別紙の解答用紙に受験番号と氏名を記入してから問題を解くこと。
◎　受験番号は所定の欄に記入後、それに該当するマーク欄にしっかり濃くマークすること。
◎　解答はすべて解答用紙の所定欄からはみ出さずに記入すること。
◎　とじてある問題用紙をばらばらにしたり、一部を切り取ったりしないこと。
◎　終了のブザーが鳴ったら筆記用具を置くこと。
◎　問題冊子は持ち帰ってもかまわない。

受験番号マーク例

良い例	●	悪い例	✓ ⊙ ◐

◎選択肢のある設問は、最も適当なものを選んでその番号を記すこと。
◎字数指定のある設問は、句読点や記号も一字とする。

【一】次の文章を読み、後の問に答えよ。

イギリスの歴史家サイモン・シャーマは２００５年に邦訳された『風景と記憶』で、「風景は自然である前に文化である」と述べている。たしかにそうだ。「山紫水明」というが、これは山が陽の光の中で紫色に霞み、川が澄みきって美しく見えることを指している。美しい自然の風景を表わす言葉であるが、山はいつも紫に見えるわけではない。日本人の心にこの色が清浄な美しさを示すのである。清少納言の『①』の冒頭も、「春はあけぼの。やうやう白くなりゆく山ぎは、すこしあかりて、紫だちたる雲のほそくたなびきたる」と記されている。世界の色は土地の文化に染められた人の心を表わすのかもしれない。私が長く暮らしたアフリカの熱帯雨林で、いっしょにゴリラの調査をした地元の人に絵を描いてもらったことがある。何と人物は紫色に、ウシは赤色に塗られていた。私から見たら地元の人は黒色に、ウシは茶色に見えるのだが、彼にはそんな色に見えるらしい。私と彼で視力が違うはずがない。文化のフィルターを通して見る世界の色が違うのだろう。

私たちが美しいと思う風景も時代や文化を反映している。雪山は今でこそ美しい風景として映るが、江戸時代までは一般の人が行く場所ではなかった。神々の座であり、山伏や猟師しか分け入る人はなく、遠くから眺める神々しい風景だったのではないだろうか。それが明治以降、登山やスキーが流行り、白樺並木や樹氷が美しい風景となった。これは欧米から輸入された文化である。

日本でも時代によって移り変わる景色がある。《　②　》日本人が神々の聖なる場所として拝む神社には縄文の原風景が、暮らしの中心には弥生以降の原風景が宿っているのかもしれない。その田園風景も急速に変わりつつある。私たちの心にあるのは茅葺（かやぶ）きの屋根とたんぽぽのあぜ道、れんげの咲く春の田であり、ドジョウやゲンゴロウが泳ぐ夏の小川、黄金色に実る稲穂と刈り取られた田んぼの秋の風景である。しかし、都会から車で畑に通い、温室栽培が流行り、自動耕運機や田植え機が活躍す

る昨今、そんな風景はもうどこにもなくなるかもしれない。

それでも時代によって変化する風景を超えて、欧米と日本ではそもそも自然の見方が違うようだ。それを指摘したのは20世紀前半に活躍した西田幾多郎、和辻哲郎、今西錦司という日本の思想家たちであった。

欧米の伝統的な考え方では、主体である人間と環境である自然は明確に区別される。人間以外の生物は自然の一部であり、③ を持つ人間だけが自然を計画的に改変できる。すべては自然の法則にしたがって動いており、生物はその自然の動きに適応するように進化してきた。人間だけが自分たちの意思で自然を作り変えることができ、それを神から与えられた権利と義務だと考えてきたのである。デカルトの「われ思う、故にわれあり」という言葉は、世界の存在をどこまで疑ってみても、それを疑っている自分は疑うことができないことを意味する。すなわち、自己の意識こそがこの世界を成り立たせている根拠だというのである。これを主語の論理という。英語やフランス語では文章には必ず主語がある。④誰が主体であるかをはっきり示さねば、その文章が示す世界がわからないからである。

これに対して日本語は述語の論理によって構成されていることが多い。たとえば、「昨日は遠足だった。バスでトンネルを抜けると秋の紅葉が真っ盛りだった」という文章を見てみよう。この主語は当然「私」なのだが、どこにも「私」という語はない。紅葉を見たのは「私たち」かもしれないし、あるいはそれを見た友達から聞いたのかもしれない。でも、主語がなくても私たちにはその情景がわかる。なぜなら、日本語は見ている者がその風景に溶け込んでいると見なすからだ。それが自分であろうと誰であろうと構わない。要はその風景に一体となった自分を感じられるかどうかということだろう。

西田は、人間を含むすべての生物は環境と切り離すことができないと考えた。西田の言葉を借りれば、「科学的態度とは、対象を見ている主体があり、その主体から切り離された対象があり、主体がその対象を観察して分析することで生み出される」。環境を客観視できるからこそ、近代科学は人間の都合のいいように環境を大幅に改変することができたというのである。近代科学は時間を単に空間化して（直線と点に置き換えて）幾何学的に見てきた。しかし生物は常に動いている。生きるという働きに立脚して見るならば、その働きは行為的に見られるものでなければならない。生命における時間というのは、生きる行為にとって直観的に感じ取られるものであるはずだ。生物は時間と空間という相異なる現象を同時に直観的に感じることができる。そう捉え、主体である自分を周りの環境から独立した存在と見るのではなく、関係性の網の目の中にいると見なす。西田がすくい取ったのは日本の伝統的な感性である。

和辻も自分が旅した世界をモンスーン、砂漠、牧場という3つの「文化圏」に大別し、「風土が人間の自己了解の仕方である」と述べている。ここでいう風土とは環境でも風景でもなく、そこに暮らす人間と一体になったものであり、人間の精神世界の表象であるといってもいい。これも［⑤］といっていいだろう。

今西は、すべての生物はもともとひとつのものから分化したのだから、互いに認め合う能力を持っているはずであると見なす。そこには「認め合いの起こる場」がなければならず、それがそれぞれの種の生物と一体となった環境だというのである。その場とは、単なる生活空間といったものを指すのではなくて、どこまでも生物そのものの継続であり、生物的な延長をその内容としていなければならない。「絶えず働かねばならぬ生物の生活とは、環境の同化であり世界の支配であり、それは結局生物に具わった主体性の発展ということにほかならない」「変異ということそれ自身もまた主体の環境化であり、環境の主体化でなければならぬ。生きるということの一表現でなければならぬ」と述べている。

じつは、彼らのような考え方は西洋にもあった。ドイツの生物学者で哲学者のヤーコプ・フォン・ユクスキュルは、１９３４年に『生物から見た世界』を著わし、それぞれの動物はその種に備わった能力を用いてそれぞれ別々の「環世界」を認知し暮らしていると主張した。つまり、生物はその環境と切り離せない関係にあり、それぞれの種はその環境を「担い込んで」いる。われわれ人間にとっての環境は、イヌやハエの環境とは異なる。生物にとっての「環世界」は人間にとっての［⑥］である。［⑥］は人間にとっての主体性を前提としており、生態学が定義する「自然環境」とは異なるのである。しかし、この考え方が西洋世界の主流となることはなかった。ドイツの哲学者マルティン・ハイデッガーはこの考えを聞いて、「ダニは貧しい世界に暮らしている」と述べたと伝えられている。明らかにこの感想は「環世界」の概念を誤解している。

先の3人の日本人思想家のうち昆虫少年だったのが今西錦司である。今西は成長してから昆虫を集めて標本箱にとどめている自分の行為を「死物学」と反省し、これからは生きている生物の研究「生物学」をやろうと決心したと述べている。生物を分類しようとすれば、その動きを止め、身体を部分に分けて比較しなければならない。しかし、それでは生物を部分的に理解したことにしかならない。分類学に限らず、生態学も生理学も行動学も、生物のある動きや働きを取り出して分析をする。それでは生物の本質である「生命の流れ」や「未来を先取りする」能力を知ることはできない。⑦生命とは「絶えず動くもの」なのである。

今西は１９８０年代になって「自然科学」ではなく、「自然学」をやろうと宣言した。自然を要素に分け、その機能を調べる自然科学は、生命の流動する関係を静止したものとして切り取り、操作可能なものとして人為的に作り変えようとした。部分に分けず、全体を丸ごと理解することが必要だというのである。そのためには、「関係性」と「流れ」に目を留める必要がある。地球という関係のネットワークを通じて、エネルギーや物は循環しながらその安定を保っている。客観的に物事を観る前に、関係のただ中に踏みとどまり、さまざまな立場に立って物事の行く末を判断する視点を持たねばならない。

それにはまず、客観主義的な、還元主義的な考えを改め、人と人、人と自然のつながりを再認識することが必要だ。これまで私たちは西洋発の自然科学の手法にしたがい、自然から距離を置き、自然を操作可能なものとして認識し、搾取し利用してきた。果ては人間自身も、自分の臓器や心までも客観的に眺め、それを改造しようとしてきた。その際、私たちがとった方法は対象を分類して部分別に切り分け、それらを徹底的に分析してそれぞれの機能を高め、ある目的のために統一して機能を発揮させるように仕向けることだった。しかし、自然も人も部分に切り分けられるものではなく、すべてがつながり合って影響を与え合っていると考えるべきなのである。

今西の自然学にしたがえば、人間も他の生物も環境に働きかけることによって主体性を持っている。そして、生物どうしはその場を共有しつつ直観を用いて認め合い、棲（す）み分けている。それを感じられる能力、すなわち共感力を人間はとくに高めてきた。それを人間に対してだけ用いるのではなく、同種の仲間、異種の生物へも発揮して、多様な生物が広く共存するコミュニティを新たに作らねばならないのではないだろうか。

現代は情報化によるグローバルな時代である。今後ますます物や人の動きが加速するだろう。すでに世界の半分以上の人口が都市に住んでいる。しだいに人々は自然から距離を置き、技術や人工的な環境に依存する度合いが強くなるだろう。しかし、情報だけに依存して行為を決めるのではなく、自然の動きに絶えず目を留め、それを心身で感得することが必要だ。ＳＮＳは通信手段として利用されるだろうが、コミュニティには「認め合いの起きる場所」が不可欠だからである。その場所はインターネット上のヴァーチャルな空間ではなく、自然が豊かで、画一的な予想ができないものである必要がある。生物としての人間は何百万年も自然の一部として心身を鍛えてきた。未来のコミュニティは個人がそれぞれ個性を持った存在として認め合わなければならず、そのためには個性を発揮できる多様な環境が不可欠である。インターネットの均質な空間と違い、常に姿を変え、時間とともに移りゆく自然は私たちの予想を裏切り、人々の直観

力を導き出して個性を発揮させる。そこに新たな創造が生まれる契機が潜んでおり、コミュニティを刷新させ活気づかせる原動力がある。

私たちにとっての風景は文化のフィルターを通した自然である。しかし、だからこそ ⑧ として自然は文化を創り、文化が私たちの情緒を作る。心と一体になった自然をどのように守るか。それは科学技術ではなく、私たちの感性に大きく依存しているのである。

（山極寿一『森の声、ゴリラの目　人類の本質を未来へつなぐ』より）

問一　① に入る作品は何か。

問二　《　②　》に入る次の文を、適切な順番に並べ替えよ。

1　ただ、今でも神社はクスノキやシイノキなど照葉樹林に覆われている。

2　しかし、1914年に文部省唱歌として発表された「故郷」は「兎追ひし彼の山、小鮒釣りし彼の川、夢は今もめぐりて、忘れがたき故郷」となっており、これはまさしく田園の風景だ。

3　日本の原風景といえば西日本以南にある照葉樹林である。

4　田園は米作が始まって開かれたものだから弥生時代以降であろう。

問三　③ に入るのはどれか。

1　主体性と直観力　　2　言葉と意識　　3　権利と義務　　4　文化と情緒

問四　――④はなぜか。

1　世界からすれば人間は客体であり、主体と客体は相互に交換可能な存在であるから。

2　個人は世界の一部であり、個人の視点がないと世界に欠陥ができてしまうから。

3　世界のあり方は個人がそれをどう認識するかに委ねられており、それぞれ異なるから。

4　自分自身の存在が不確定であると、世界の存在も疑わしくなってしまうから。

問五　⑤ に入ることばを、これより前の本文中から五字以内で抜き出せ。

問六　⑥ に共通して入る語を本文中から抜き出せ。

問七　――⑦とはどういうことか。

1　生物ということばの定義は、学問分野や時代によって変遷するものであるということ。

2　生物の本質は、さまざまな場所に移動することにあり、決して一定ではないということ。

3　生物は、標本のように静止して見えても、内部では生命活動が続いているということ。

4　生物は、他者との関わりの中で自分自身を作り変えていくものであるということ。

問八　⑧ に入るのはどれか。

1　反作用　　2　反映　　3　反面教師　　4　反省

問九　本文の内容に合うものを二つ選べ。

1　ユクスキュルの提唱した「環世界」という考え方は西洋世界の主流となり、ハイデッガーがその考えを広めた。

2　自然を要素に分け、部分を切り取って分析する自然学に対して、自然科学は自然を全体として捉えて理解しようとする学問である。

3　生物がそれぞれに互いの個性を発揮し、生きていく場を棲(す)み分けながら共有するために必要な力が共感力である。

4　ＳＮＳは通信手段として利用され、コミュニティを刷新させる契機となりうる媒体である。

5　シャーマはその著書の中で、自然の風景は文化には全く影響されないものと考えていた。

6　欧米の伝統的な考え方では、人間以外の生物は自然を作り変えることはできないとされる。

【二】次の文章を読み、後の問に答えよ。

食べているときはすっかり無防備になっているからなのだろう、ひょいと足払いをかけられただけで、あっけなく地面に突っ転ばされてしまう。

鹿児島で老夫婦の農家を訪ねたときのことである。畑からもいだばかりのきゅうりと手製の味噌がお茶請けに出された。手づかみできゅうりを齧(かじ)ると水気がぴちぴち弾け、そこへ味噌がねっとり絡んでたまらなくおいしい。勢いこんで、こんな味にはめったにお目にかかれませんと伝えると、日焼けした額に何本も深い皺(しわ)を刻んだおじいさんが照れながら、しかしきっぱり、わたしの顔を見据えてこう言ったのである。

「まあ東京のひとはおおげさを言いよるねえ。わしらはなんでもあたりまえに食うとる。うまいもんもまずいもんも、黙って食うことにしとる。うまいとかまずいとかいちいち考えとったら、きりがないからのう」

日々おひさまの光を浴び、両足を土にめりこませて畑仕事にいそしむ篤実な生活から発せられた飾りのない言葉だった。わたしに、というより、おじいさんが自身に言い聞かせた言葉であったかもしれない。だからこそまっすぐ刺さってき、①突っ転んだ痛みが羞恥となってせり上がってきた。その通りかもしれない。まずかろうがなんだろうが、出されたものは四の五のいわずありがたく食べたいとつねづね肝に銘じているのだが、ことさら「おいしいもの」をまえにすると、おおいに反応してしまう。やたら褒めそやしたり、「感動」してしまうのだ。とかく食べものの味について過剰に反応しがちなのは、習い性とはいえ「東京のひと」の悪癖でもあるだろうか。

いまひとつ自信がないのである。魚屋で切り身の魚を買い、八百屋で葉のない大根やにんじんを、つくりものみたいに光っているまっ白のかぶを買い、またはテーマパークみたいなデパ地下の食料品売場に慣れ親しんだりしていると、そのうち自分の食卓が［　②　］。実体のない領域にぷかぷか浮かんでいる感覚に襲われてくる。買ってばかりいる生活に実(じつ)はあるのか。だから確固とした自信がない。その反動として「おいしいもの」に過剰な反応を示してしまうのかもしれないのだった。

太宰治『津軽』に、「東京の人は、どうも食い物をほしがりすぎる」というくだりがある。

東京の人の中には、意地も張りも無く、地方へ行って、自分たちはいまほとんど餓死せんばかりの状態なのです、とひどく大袈裟に窮状を訴え、そうして田舎の人の差し出す白米のごはんなどを拝んで食べて、お追従たらたら、何かもっと食べるものはありませんか、おいもですか、そいつは有難い、幾月ぶりでこんなおいしいおいもを食べる事でしょう、ついでに少し家へ持って帰りたいのですけれども、わけていただけませんでしょうかしら、などと満面に卑屈の笑いを浮べて歎願する人がたまにあるとかいう噂を聞いた。

とはいえ、太宰治はひと一倍食いしんぼうの大食漢だった。青森県屈指の大地主、津島家の息子であることを嫌って東京に逃亡したのに、けっきょくは選ばれた人間であるという優越意識から抜け出せず、東京に暮らしても食べものは津軽のものを好んだ。「東京の人は」③とあげつらいながら、みずから選んだ東京での現実の生活に不安を抱きつづけるところに太宰治の苦悩のありようがあからさまに表れている。そして「東京は、おいしいものが何でもあるところだから、お前に、何かおいしいものを食べさせようと思っても困ってしまうな」という祖母のおっとりした言葉にこどもじみた幸福感をおぼえながら、ひさしぶりの津軽を旅するのである。

鹿児島のおじいさんは「わしらはうまいもんもまずいもんも黙って食う」とわたしを突っ転ばしておきながら、そのあとでこうつぶやいた。

「ええのう、東京にはおいしいものが何でもあってのう」

目を見開かされた。おじいさんは、無意識のうちに「うまいもん」と「おいしいもの」をきっかりと言い分けているのである。

「うまいもん」は日常生活の食べもの、「おいしいもの」はハレの気配を漂わせるとくべつな食べものを指す言葉であるだろうか。手を伸ばせばそこになんでもある東京の、または都市部の日常生活にあっては「うまいもん」も「おいしいもの」も食卓のうえでごたまぜで、そこには神経を麻痺させる享楽の匂いもある。買えば、すぐ手に入る。しかし、買えなければ、その日から生活はたちゆかない。けっきょく自分の食卓は、ひねればあっけなく折れてしまう赤子の手のように弱々しい。これでいいのかと思いながら、しかし、これよりほかにどんな道が自分にはあるのかとも思う。それは、自嘲気味に東京を揶揄してみせる太宰治のすがたにそっくりだ。

そんな腰の定まらなさ、一抹のうしろめたさをぐさりと刺してくる本が、岩村暢子『家族の勝手でしょ！　―写真274枚で見る食卓の喜劇―』だ。

首都圏に住む主婦百二十人を対象に、広告代理店アサツー ディ・ケイに在籍する著者が中心となって「食ＤＲＩＶＥ」調査と名づけ、二〇〇三年から六年間、百二十家庭の一週間の食卓を定点観測した調査の結果報告である。ひとつのサンプル家庭ごとに【アンケート・主婦本人による写真記録・インタビュー調査】の三段階を踏まえた調査をおこない、その分析結果から構成されたこの一冊は、一連の著作『変わる家族 変わる食卓』『〈現代家族〉の誕生 幻想系家族論の死』『普通の家族がいちばん怖い』などとならぶ現代の日本のすがたを食卓から捉えようとする果敢な試みだ。日本人の食卓をかんがえるとき避けては通れない本である。

タイトルからして、とても［④］的だ。家族の食卓に「勝手でしょ」と居直らせているが、返す刀で「喜劇」とばっさり断じて距離をとり、調査報告としての客観性を印象づける。または、「悲劇と呼ぶことさえためらわれる現実なのだから、とりあえず『喜劇』として笑うほかない」というメッセージでもあろうか。いずれにしても、その［④］にまんまと乗ってみれば、主婦がみずから撮影したスナック菓子の袋が山盛りになっている朝食の写真を眺めて「まさか信じられない」「そら恐ろしい」、受けた衝撃をひきずりながらページをめくることになるだろう。

「省略される皿と味噌汁の回し飲み」（主婦33歳・夫34歳・長男13歳・次男6歳・長女3歳）の朝食。まとめて一度に焼いた四つの目玉焼きが大皿にのせられている。面談で得たコメントが短く添えられる。

「ウチは朝揃って食べるのではなく、起きてから出かけるまでの間にそれぞれのペースで食べていく。目玉焼きも一度に焼いて大皿盛りにしておくと食べたい人が順番に食べていく。味噌汁なども飲む人にしか出さない」

忙しい朝はまあそんなもんかな、と思う。でも、飲む気がなくても熱い味噌汁をよそった椀が目の前にあれば手をつけるのに、とも思う。

「お父さんが居るとき居ないとき」（主婦30歳・夫34歳・長女5歳・長男3歳）の夕食。「市販の味付きそぼろを混ぜたご飯、前日の残り物の味噌汁、納豆」の写真に添えたコメント。

「夫が家で食べないとわかると、つい手抜きになってしまう。味付きそぼろもご飯も味噌汁も納豆も、冷蔵庫に残っていたものをそのまま出して食べた」

そりゃそうだな、とうなずく。「いつも晩ごはんを食べるお父さんが、きょうは食べない」ときは、食事のしたくに追われる主婦に

とっては「ラッキーな日」だ。ああ助かった楽ができると解放感を味わうのは、主婦ならだれもが経験する素朴な感情である。最初はスナック菓子の山盛りの朝食にぎょっとしたり、ひとりずつ種類の違うカップ麺とお茶の組み合わせがきちんと揃っている昼食に苦笑したりするのだが、そのうち「あるよねそういうこと」。⑤生活につきまとうたくましさ、要領のよさ、図太さを目の当たりにして、いっそ痛快でもある。

ただし、微妙な居心地のわるさも浮上してくる。たとえばきのうのわたしの昼ごはんは、塩おにぎり一個、肉屋で買ったコロッケ、さくらんぼ十数つぶだった。忙しくて台所に立つひまもなかったし、空腹でもなかったから、手近なものですませたのである。ところがその一食の写真をおなじカメラで撮影し、そこにコメントが添えられれば、きっとこんなふうだ。

「具なしの素おにぎり、近所で買ってきた惣菜、いつも野菜をたくさん摂っているといいながら野菜がない」

すみませんわたしだめな人間です、とお縄を頂戴したくなってくる。「人数分出されない魚料理」の項で、どきっとする。おおきな切り身の塩鮭を焼いたとき、ふたり分に切らずひと皿に盛って出すこと、わたしけっこうあります。（すでに切り身なのに、さらに切り分けると、しょぼくれたかんじになってしまうので）。「団欒には単一素材料理」の項で、またあせる。最近しばしば「単一素材料理」が多くて、ブロッコリはブロッコリだけ、かぶはかぶだけ、トマトはトマトだけうつわに盛り、食卓で取り分ける（それぞれに合う切りかたや塩の量を塩梅してひとつずつ味わいたいので）。しかし「家族が多くて好き嫌いが分かれる家庭ほど、単一素材の料理が多くなるのである」という分析を読むと、うーん違うんだけどなあと思いながら、やっぱり「単一」はみょうなのかと、かすかに動揺する。

ねえちょっとヒラマツさんあの本読みました？　と腹立たしげに聞かれたことがある。え、どれ、と問うと『家族の勝手でしょ！』なのだった。

「おもしろいんですけれどね、読んでいるうちにだんだん不快になってくるんですよ、家事を強要されているみたいで。ただしい主婦になれ、もっとちゃんとしろって暗に非難されている気分さえしてくる」

ああそれわかる、無理ないよねと応える。「ただしい主婦になれ」とはどこにも書かれていないのに批判されている気分を味わうのは、自分の食卓にたいする不安や疑念があるからだ。だから「この食卓、どう思います？」と記録写真や文章に問いかけられると、感情を逆なでされる。じっさいの自分の食卓とは異なっていても、後ろめたさを煽られて不愉快を催すのだ。目をそむけておきたい自分の現

実は見ないまま、見えないままにしておきたいのに、ほら直視しろと責められる――。

四十二歳の主婦の彼女はふかぶかと嘆息する。ああもうほんとにね主婦はつらいのよ。しかし、こうも言っていた。

「でも、『普通の家族がいちばん怖い』⑥、あれには笑った。笑っていられたというか」

『普通の家族がいちばん怖い』のサブタイトルは「崩壊するお正月、暴走するクリスマス」。元日の朝の菓子パンやふだん通りの「うどん、パン、餡(あん)まん、おにぎり」の食卓風景を見ても、高みの見物を決めこみながら読めるというのが飾らない本音だ。

「主婦にとって安心材料なんですよ。わたしはここまでひどくない、もっと怖いお正月やクリスマスはこんなにあるって思えるから」

取り上げられているテーマは正月とクリスマスという「非日常」だから、対岸の火事として眺められる。しかし、日常の一週間の記録となればあまりに身近で、リアリティが迫ってくる。

『普通の家族がいちばん怖い』の調査報告には、著者の主観がより色濃く書きこまれている。クリスマスは「ウチだけ盛り下がっていていいのか？　やらなきゃいけない！　と思うんです」と言う三十一歳の主婦にたいしては、こう記されている。

「そこで『いっそ、ウチはウチと割り切ってはどうか』と提案してみると、『ええっ、私の独断と偏見でいくんですか？』とあきれ顔で言う。『周りに合わせる』ことの反対は『独断と偏見でいく』ということになるのだろうか。『主体的』という言葉は死語のようだ」

ひとが⑦自分の個を生きていない――これが、十三年間収集した調査資料と格闘し、さまざまな家族の食卓と向き合って著者が得た最大の手ごたえではないだろうか。個を生きている実感が薄いから、おのずと妻や親としての自分を生きておらず、夫にもこどもにも正面から向き合っていない。家庭のなかの人間関係に波風をたてたくないから、家族が好き勝手に食べたいものだけ食べる朝食があり、こどもの数だけクリスマスツリーやケーキがあるのだ。『家族の勝手でしょ！』のなか「4日目　朝食」（主婦43歳・長男12歳・次男10歳）の写真には、ミネラルウォーター、うどんを煮た鍋、うどんをよそった椀が写っている。

「主婦と子供たちの朝食は、昨夜の鍋の残りつゆにうどんを入れたもの。

『子供たちは野菜が嫌いだし、ウチではスパゲティやスープなどにも具は入れなくていいと思っている。栄養のことはあまり考えないし、自分も忙しいので特に野菜を用意しようとは思わない』」

なにかがずるりと抜け落ちている。忙しさにかこつけてずり落ちているのは、家族がおたがいに向き合う関係なのだ。そのはんたい、

こうも言えるのではないか。腰が据わっていなくとも、自信などなくても、おたがいが向き合ってさえいれば、きっと食卓はおのずとあとからついてくる。

（平松洋子『野蛮な読書』より）

⑧

怒りつつ洗うお茶わんことごとく割れてさびしい　ごめんさびしい　　東直子

問一　――①とはどのような感覚か。

1　感動するべきポイントを見誤ったために叱責されて落ち込んだ
2　褒めたり喜んだりした感情の浅薄さを見透かされて居心地が悪い
3　都会と地方との間にある感情表現の差異に気づいて愕然（がくぜん）とした
4　自分ははじめから相手にされていなかったのだと知って悔しい

問二　［②］に入るのはどれか。

1　海や山からの搾取でできていることに気づく
2　海や野山に思いをはせる場であると知る
3　海や山の幸に彩られて洗練されてゆく
4　海や野山から遠い場所に離れてゆく

問三 ――③の「あげつらう」の意味はどれか。

1 すぐれた要素を無視して同等に扱う
2 都合の良い点だけを比較して蔑む
3 特定の事柄のみに注目してもてはやす
4 ささいなことを取り立てておおげさに言う

問四 ④ に共通して入る語を考えて記せ。

問五 ――⑤とはどのようなものか。

1 家事の不完全さを偽装によって覆い隠す賢さ
2 毎日完璧な生活でなくともよいのだという開き直り
3 家庭内で担わされた役割を放棄する反骨精神
4 理想的な栄養摂取と健康は比例しないという信念

問六 ――⑥のように言われているのはなぜか。

1 想像を絶する状態だから
2 絶対に届かない理想だから
3 同調圧力がかけられるから
4 現実と直面せざるをえないから

問七 ――⑦とはどういうことか。

1 多忙すぎて自分を見失っている
2 家族の一員という立場に甘えている
3 自分の意思や主張を持っていない
4 流行や風潮に左右されて生きている

問八　本文の内容をふまえると、［　⑧　］に入る短歌はどれか。

1　パンを焼く家の裏口とおもほえて香ぐはしき午後の路地をとほりぬ（佐藤佐太郎）

2　内ふかく春の潮を含みたる大はまぐりを一口に食ふ（内藤明）

3　オムライスをまこと器用に食べおれば〈ケチャップ味が好き〉とメモする（俵万智）

4　歳晩の鍋を囲みて男らは雄弁なれど猫舌である（小島ゆかり）

【三】次の文章を読み、後の問に答えよ。

そのころ、都のうちに俄道心[注1]おこして、浮世をめぐる痴者あり。みづから新房とかや名をつきて、かたのごとく気ままなるだうけ者なり。「五月四日は大事の日にて、なゐふりつつ、大地がさけて泥の海になるか、しからずは、火の雨がふりて一面に焼けほろぶるか、いかさま世の中滅すべき境目なり」といひはやらかす。京中の貴賤上下、聞きつたへ、血の涙を流して恐れかなしむもあり。又、「①いかなる事にも、さやうにはあるまじきぞや」といふ者も有りけり。

ある町人の、身上もまづしからず、ともかうもして住みける者、この沙汰をきくに恐ろしさかぎりなく、手ふるひ、足わななき、目くらみ、胸おどりて、うつつ心になりしかども、「男たらんもの、色に出だして恐れまどはば、人のため笑はれんも口惜しく」思ひて、②さらぬやうにてふせり居る。「③今やゆり出でて、［A］になるらん。［B］ふるべきか」と思ひける所に、案のごとく④未の刻ばかりに、北のかたよりどうどうと鳴りひびき、しきりに大なゐゆり出でければ、「すはや、今こそ草木国土、人も鳥もけだものも、みな一同に成仏するなり。【⑤】もしやのがるる事もあり、足にまかせて逃げてみよや」とて、妻の女房が手をひつたて、南をさしてかけ行きつつ、七条川原に出でたり。

かくて、ゆり止みければ、しばらく心をしづめて、つらつら見れば、手をひきてうちつれ逃げたるは、妻の女房にはあらで、さしもなき熊野比丘尼の、地震におそれて逃げこみたるを、是非なく手を引きて、七条川原まで逃げ来たりぬ。「口惜しき事かな。さこそ人のわらひ種になるべし」と思ひつづけて、我ながらをかしく、日ぐれがたに家にかへりしかば、妻の女房、⑥大いに腹をたて、「日ごろそなたの思ひたまひけるしるしには、我をば打ちすてて、尼が手をひきて逃げ出でたまふ腹立ちさよ。その尼と来世までもそひたまへ。我には隙をあけて、入婿なれば出でていね」とて、ふりくすべければ、男のいふやう、「人たがへといふ事は、ためしなき事か。わごぜかと思ひて、とりちがへたり。それをふかく腹立つは、客妬[注2]なり。⑦わがよむ歌をきかしませ[注3]」とて、

なゐよりもつまにふらるる苦しさにきげんなをしといふは世なをし

といへば、女房いよいよ腹をたて、「何の歌どころぞ。聞きたうもなし。今はこれまでなり。その尼が所へ行かしませ」とてつき出だす。けしかる地震のぞめきに、とりさふる人もなし。

男、ちからなく出づるとて、門柱かきつけける。

⑧出でていなば心かろしといひやせんこのいさかひを人はしらねば

涙とともに追ひ出され、今は世に住むべき甲斐はなし。にはかに髪をそりて、こころもおこらぬ青道心をおこし、ここかしこ知れる人のもとに立ち寄りて、昨日今日とするほどに、⑨水無月・[　　]はすぐれども、なゐの名残はいまだ止まず。そのあひだに国々所々をめぐりて、このたびのなゆにて崩れ損ぜしありさま、こまかに見聞きつつ語りはべりしこそ、たしかなれ。

（「かなめいし」より）

注1　俄道心…急に出家を思い立つこと
注2　吝嫉…嫉妬
注3　世なをし…地震の時に唱えることば

問一　――①とはどういうことか。
1　どんなことがあっても、思いつきで出家するのはよくないということ。
2　どんな理由があって、血の涙を流して悲しむのだろうかということ。
3　どんなことがあっても、この世が滅ぶことはないだろうということ。
4　どんな理由があって、大事の日の到来がわかったのだろうかということ。

問二　――②はどのような様子か。
1　噂を信じようとしない様子　　2　他人を見下している様子
3　正気を保っていられない様子　　4　冷静を装っている様子

問三　――③の[A]・[B]に入ることばを本文中からそれぞれ三字で抜き出せ。

問四　――④「未」は十二支の一つである。この漢字が表す動物をひらがなで記せ。

問五　【　⑤　】に現代語で接続語を入れるとしたらどれか。

1　しかし　　2　だから　　3　そして　　4　また

問六　――⑥はなぜか。

1　夫が自分の身の安全しか考えていない臆病者だったから
2　夫が無理に女を引っ張って行くような乱暴者だったから
3　夫が言い訳をして素直に非を認めない卑怯者だったから
4　夫が女房と他の女を取り違えるような馬鹿者だったから

問七　――⑦「歌」の説明とそれを聞いた女の反応はどれか。

1　常套句を使って謝意を伝えようとした歌だが、女は地震を連想させる表現を不謹慎だと思い男に苛立った。
2　洒落た表現を用いて切ない想いを訴えた歌だが、女は真剣味が感じられない歌だと思って不愉快になった。
3　韻を踏みながら女の主張を認めた歌だが、女はただ男が開き直っているだけだと感じて不快になった。
4　ふざけた調子で別れの寂しさをごまかした歌だが、女は男が本音を隠し続けることを不満に感じた。

問八　――⑧とはどういうことか。

1　私が家を出ていかなくても、女房を安心させることはできるだろうということ。
2　私が家を出ていったら、世間の人は私を浅薄だと言うだろうかということ。
3　女房が家を出ていかなかったら、世間の人は私を責めるだろうかということ。
4　女房が家を出ていっても、私の心が晴れることはないのだろうということ。

問九　――⑨の［　　］に入る、水無月の次の月の異名を漢字で記せ。

問十　本文の内容に合うのはどれか。

1　五月四日に地震が起こるという噂話を都の貴族たちは知らなかった。
2　地震で仲違いするまで男と女は貧しいながらも仲良く暮らしていた。
3　男は比丘尼に浮気心を抱いたため友も家も財産も失うことになった。
4　男は旅の途中で地震の被害を見聞きして無常を感じ道心を起こした。
5　男は地震時の自分の行動が大事につながるとは予想していなかった。

【四】次の問に答えよ。

問一　次の傍線部の漢字をひらがなに、カタカナを漢字に直せ。

①　このまま値上げが続けば未曾有の経済危機が訪れるだろう

②　挽きたてのコーヒー豆が醸す味わいを楽しむ

③　論理がトウサクしていないか確認する

④　シンクのバラの花束を贈る

⑤　疑惑をフッショクするための材料を集める

問二　次の傍線部のカタカナと同じ漢字はどれか。

①　過去をセイサンする

1　論文執筆にはセイミツな考証が必要だ

2　社長をセイジン扱いするのは危険だ

3　セイカンを祈って友人を見送った

4　セイリョウな山の空気にふれる

5　選挙制度のセイジョウ化を誓う

②　スポーツの上達にはフダンの努力が必要だ

1　カダンに富んだリーダーの発言に奮起する

2　災害を乗り越えるためにダンケツした団体

3　ダントウにより農産物の不作が見込まれる

4　友人に対する裏切り行為をキュウダンされた

5　著名人どうしのタイダンは誌面上で実現された

③ フクスイ盆に返らず

1 ハンプクすることで言語の習得に努める

2 生徒会のフクカイチョウに選ばれる

3 動物とたわむれるのはシフクの喜びだ

4 キフクの多い道を自転車で駆け抜ける

5 テンプクした船から救助される

問三 次の空欄に入る漢字一字をそれぞれ記せ。

○ 彼はたまに的を［①］た質問をして先生を驚かせる。

○ 運動するメリットは［②］挙にいとまがない。

○ 自分の探し物が見つかったら、あとは野となれ［③］となれというつもりで片付けない。

○ 困難を打開するためには、ライバルとも呉越［④］舟で力を合わせなくてはならない。

○ 安く買える商品を求めてわざわざ電車で出かけるなんて朝［⑤］暮［⑥］もいいところだ。